

3 禁教期関連遺跡調査 (ジブの墓・ビッチの墓)

(1) ジブの墓について

諫早市早見町955-1の畑の中にあり、すぐ北側には江戸時代時から伝わる島原街道が通る。ジブの墓は、早見の集落にあり海岸にある歳神社から約95m離れている。現在でも集落から離れた地にあるが、江戸時代の絵図(写真50)においても同じく人里離れた場所であったことが確認できる(註1)。ジブの墓については、次のような語り継がれた話がある。「島原の乱後、隠れキリシタン(潜伏キリシタン)のジブという人が早見の西のはずれの田代というところに住んでいましたが、役人の知るところとなり、長崎から召し捕るための役人がやってきました。ジブは逃げましたが、丘の途中の急坂で捕まり処刑されました。この急坂を目っ飛び坂、または召し捕り坂と呼び、後にメットイ坂となったようです。メットイ坂を登り詰めたところの畑の中に、今でも石碑(墓)

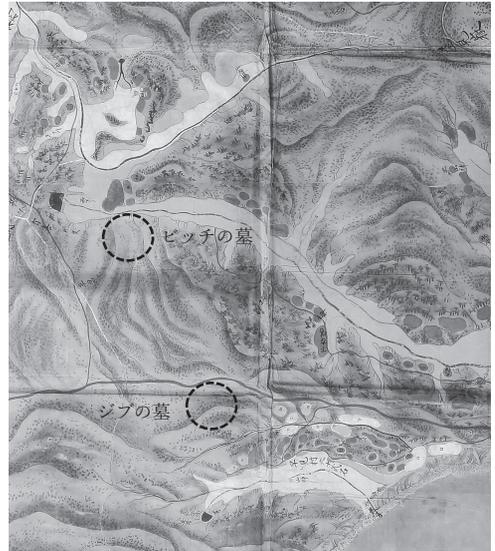
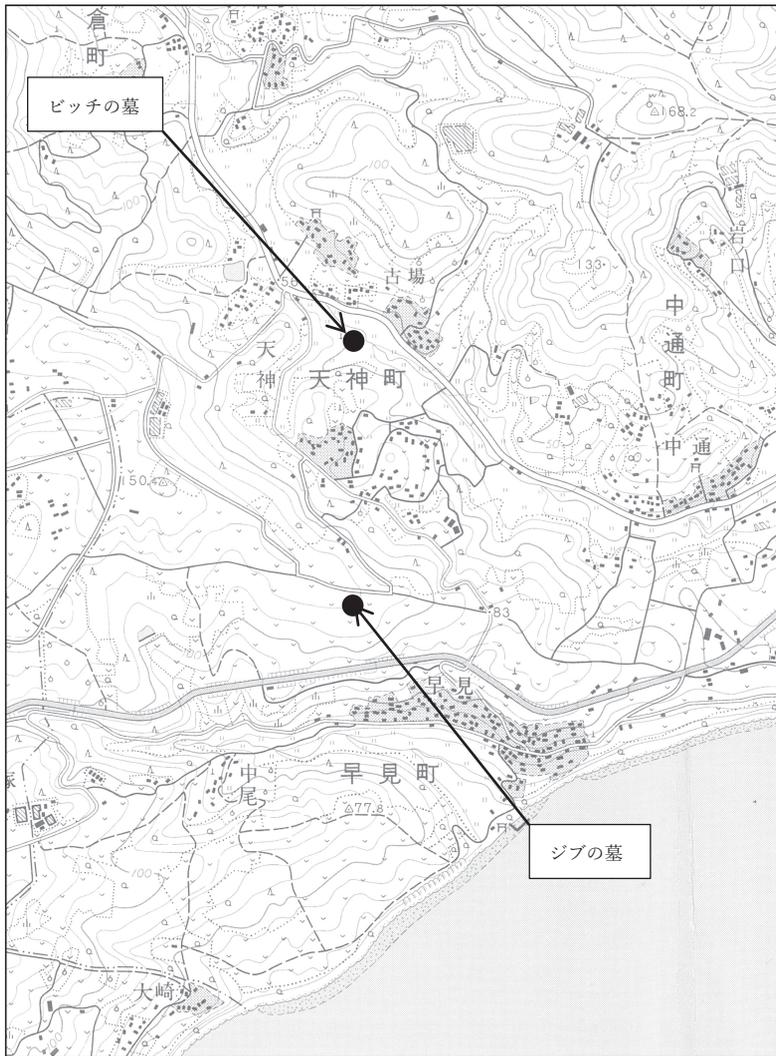


写真50 江戸時代(元禄年間)の絵図



第53図 「ジブの墓」及び「ビッチの墓」位置図 (S=1/25,000)



第54図 「ビッチの墓」位置図 (S=1/2,500)



第55図 「ジブの墓」位置図 (S=1/2,500)

が立っています。」（H18歴史探訪「宇木会」編集委員会より引用）

ジブについては、その親子が住んでいたというジブ屋敷跡もその場所が伝わり、メットイ坂の下にジブ屋敷跡と伝わる場所がある。

（2）ジブの墓

写真測量により第56図の平面・立面図及び第57図の展開図（正面・背面・右左側面・平面・断面）を作成した。

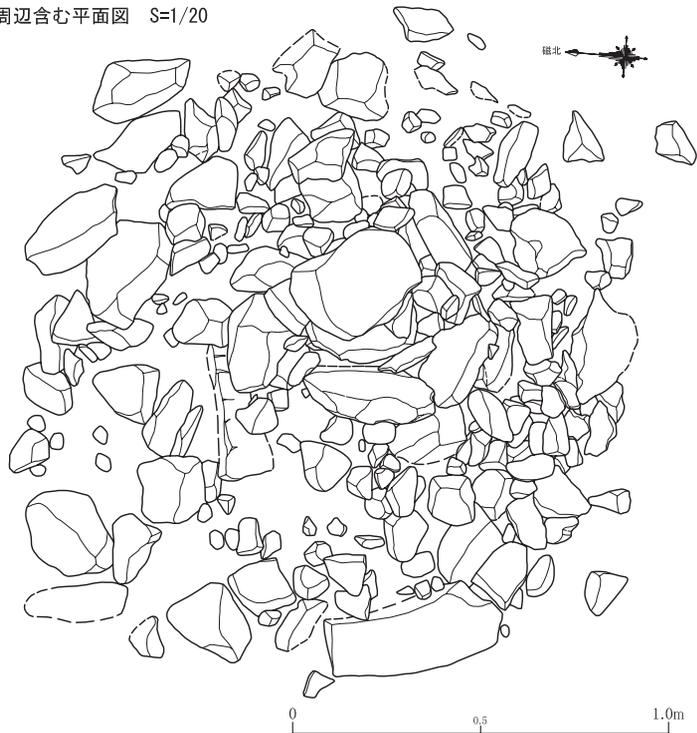
板状の自然石を利用しており、展開図に示すとおり、地上に表出している部分は高さ54cm、幅32センチ（地上30cmの高さの幅）、基部幅27cm、厚さは最大で11cm、基部で3cmとなる。ほぼ南北方向に軸を合わせており、展開図では西に面する部分を正面として、東に面する部分を背面として建立されている。背面側遠方には、橘湾と雲仙岳が位置する。断面図に見るように西側に傾いており、石材は安山岩と思われる。墓碑銘などは確認できない。表面は風化・剥落が進行しており、基部は不安定で手で押すと揺れるほどの状態である。

ジブの墓の下には小規模な積石が附属しており、平面・立面図に示す通り平面形は自然石を中心にした南北165cm、東西183cmの楕円形で、高さ25cmまで40cm以下の安山岩の自然礫を積んでいる。ジブの墓は畑に営まれており、積石の基部の高さは周囲の畑とほとんど変わらない。

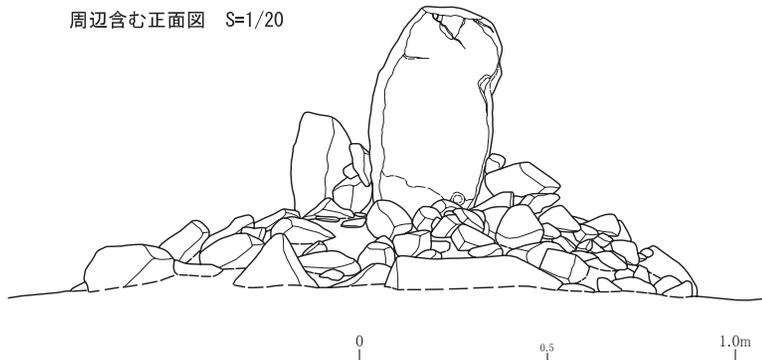


写真51 「ジブの墓」位置図（上空写真、H17撮影 S=1/2,500）

周辺含む平面図 S=1/20



周辺含む正面図 S=1/20



第56図 「ジブの墓」平面図と正面図（西側から、S=1/20）



写真52 「ジブの墓」と雲仙岳



写真53 「ジブの墓」と多良岳



写真54 「ジブの墓」西から

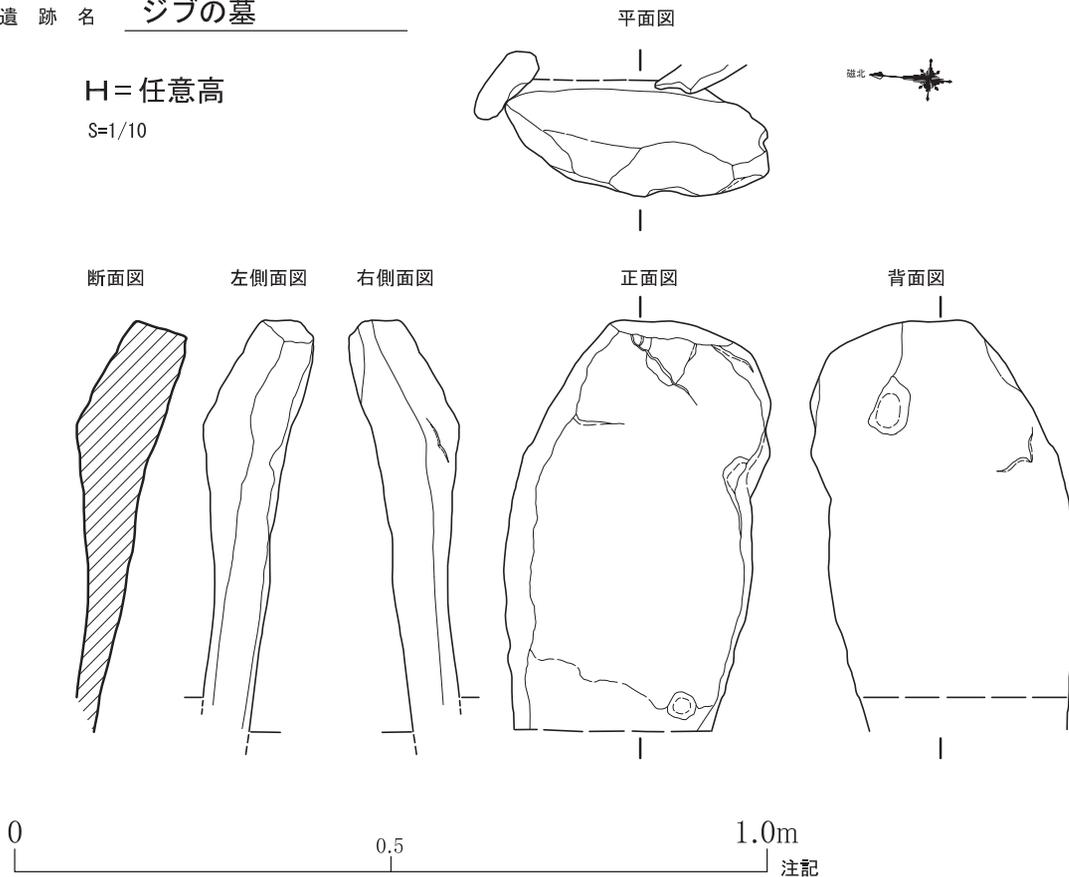


写真55 「メットイ坂」南から

遺跡名 ジブの墓

H = 任意高

S = 1/10



注記
 石材は安山岩の自然石だと思われる。
 墓碑銘など記名は確認出来無い。
 風化・剥落が進行している。
 不安定な基盤の上に立つ。前後に揺れる状態。
 周辺の礫は他の場所から持ってきていると思われる。

第57図 「ジブの墓」 墓石展開図 (S=1/10)

(3) ビッチの墓について (第53図 : 1/25,000、第54図 : 1/2,500地形図)

諫早市天神町1283の墓地の中にあり、現在でも集落から離れた地にあるが、江戸時代の絵図(写真50)においても同じく人里離れた場所にあたる(註1)。安政年間の絵図には、畑と同じ白い表示で「ハカ」と記載があり、寺院の土地としてある鼠色に塗られた「ハカ」とは異なる表示にされている。早見の歳神社までの直線距離は175mで、有喜川を下ると有喜の海岸へ至る。ビッチについては、次のような話がある。「隠れキシリタン(潜伏キシリタン)としては、早見のジブ、天神のビッチ、小ヶ倉のジローの3人が伝説的に残っています。早見のジブについては、語り継がれた話も



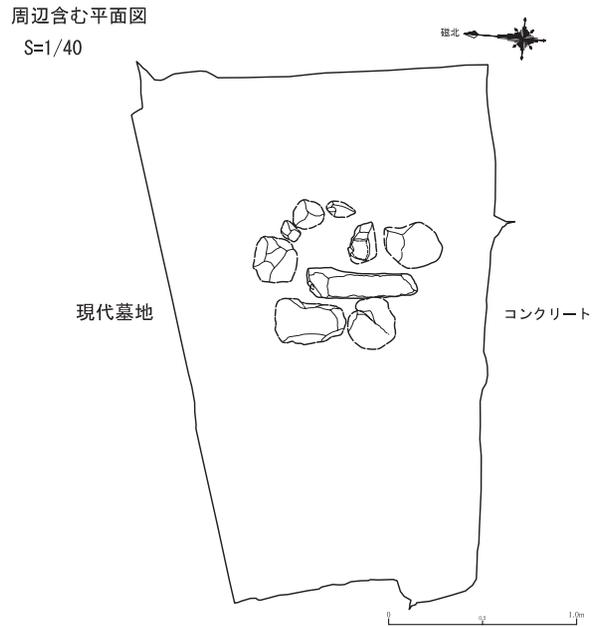
写真56 「ビッチの墓」位置図(上空写真、H17撮影 S=1/2,500)

ありますが、ビッチやジローについては、何も分かっていません。ビッチが隠れるようにして住んだとされている「ビッチ穴」が天神町の民家の近くにありますが。また、自然石の「ビッチ墓」がすぐ近くの墓所の中央部の草藪の中に立っています。」(H18歴史探訪「宇木会」編集委員会より)

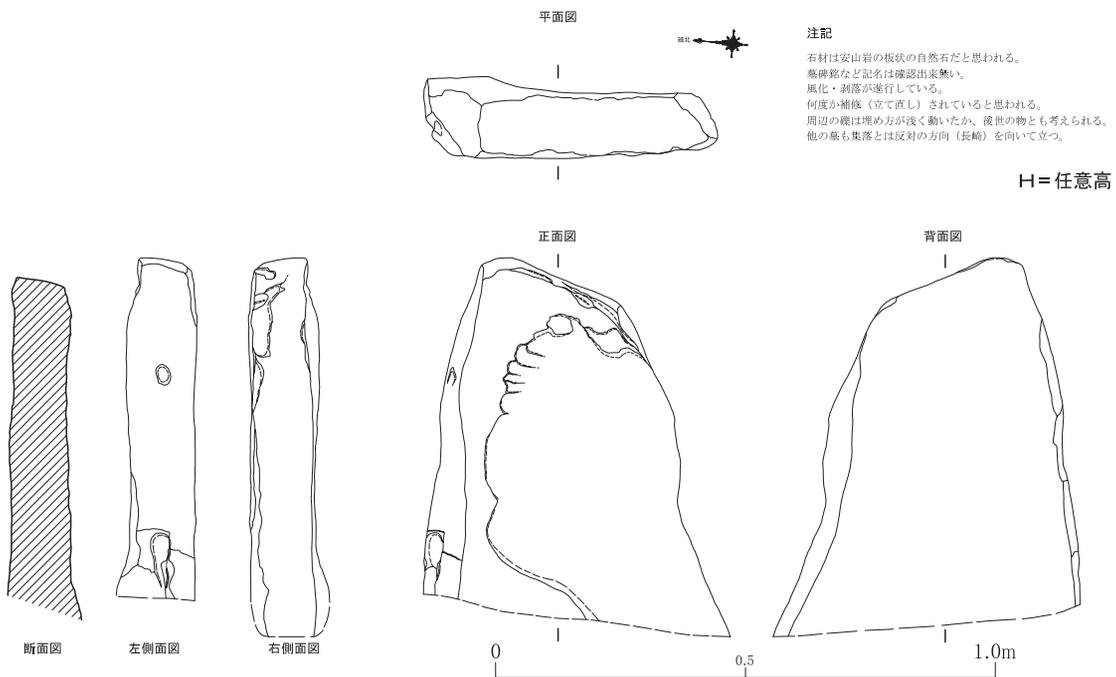
(4) ビッチの墓

写真測量により第58図の平面図及び第59図の展開図を作成した。板状の自然石を利用しており、展開図に示す通り、地上に表出している部分は高さ75cm、幅47センチ（地上40cmの高さの幅）、厚さは最大で17cm、基部で3cmとなる。ほぼ南北方向に軸を合わせており、展開図では西に面する部分を正面として、東に面する部分を背面として。背面側遠方には、橘湾と雲仙岳が位置する。周辺の現代墓も含めて、墓石の正面は西側を正面として建立されている。

断面図に見るように厚みの均等な板状の石材で、ほぼ直立しており地下に埋蔵された幅は地上部分よりも広がっていると想定できる。石材は安山岩と思われる、墓碑銘などは確認できず、表面は風化・剥落が進行している。周囲に8個の角礫を配しており、ビッチの墓を中心にして南北1.9m、東西2.9mの方形の空間を介して、コンクリート舗装及び現代墓の壁が方形に取り囲んでいる。墓石はその中心からやや東側にあり、周辺には自然石及び切石の方柱状の墓碑が多数存在する。



第58図 「ビッチの墓」平面図 (S=1/40)



第59図 「ビッチの墓」墓石展開図 (S=1/15)

註

1 長崎県所蔵（長崎歴史文化博物館）の安政年間に作成された絵図においてもジブの墓が所在する地域は畑となっている。

参考文献

H18歴史探訪「宇木会」編纂委員会「ふるさと再発見 有喜ロマン小路」

H19井手口泉『早見町に伝わる「隠れキリシタンジブ伝説」』諫早史談第39号 諫早史談会

図版出典

第53図 国土地理院地図「諫早南部」H13年発行より作成

第54図 諫早市作成1/2500基本図より作成

第55図 諫早市作成1/2500基本図より作成



写真57 「ビッチの墓」がある天神の墓所



写真58 「ビッチの墓」周辺にある墓石①



写真59 「ビッチの墓」周辺にある墓石②



写真60 「ビッチの墓」周辺にある墓石③

4 禁教期関連遺跡調査

(1) 金谷遺跡の織部灯籠・新道町の織部灯籠

金谷遺跡は金谷町71の公民館敷地内にあり、周辺は市街地化が進んでおり、織部灯籠1基含む石造物群としての遺跡登録である。

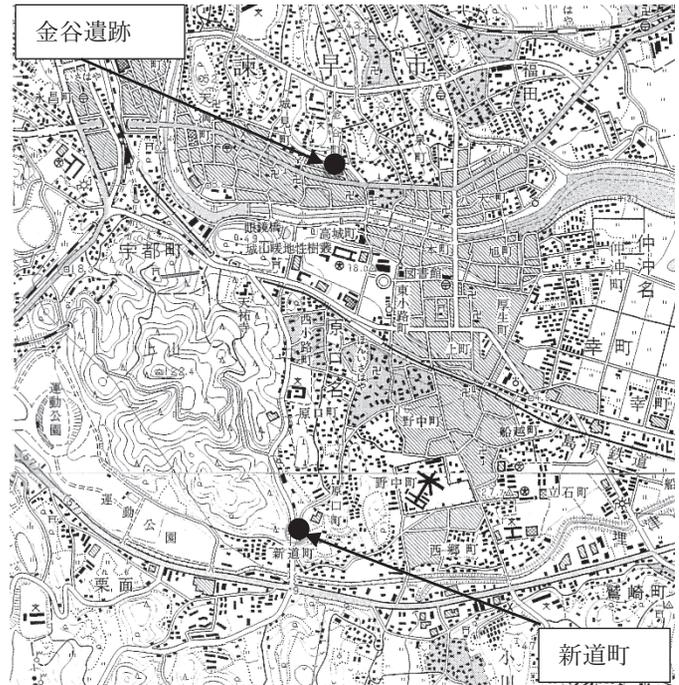
新道町の織部灯籠は新道町976-1にあり、半造川北岸の江戸時代からある道沿いで道を挟んですぐの西側には墓石が並ぶ斜面がある。

(2) 金谷遺跡の織部灯籠

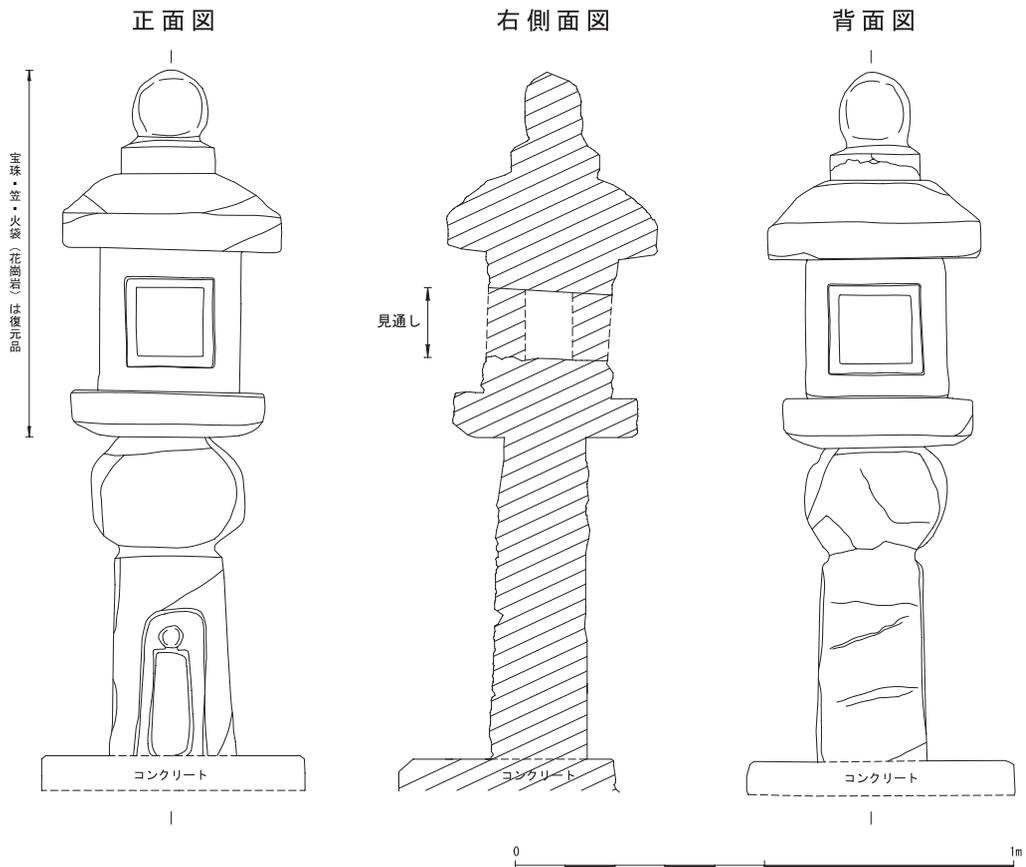
安山岩製の織部灯籠の竿部で近代の復元品が載る。寸法は高さ63.5cm、幅22cm、奥行18cmで、織部灯籠の特徴である球形と方形の柱を組み合わせた形態である。球形部分は高さ23cm幅30.5cm奥行18cm、方形の柱部分は高さ40.5cm（地上に露出した部分のみ）幅22cm、奥行18cmで、正面に長方形の浅いくぼみを掘り込み、その中に人物像を浮彫りしている。長方形くぼみの上端は隅丸方形の平面形態で、高さ29cm、幅13cmで、球形部の下端にある溝の12cm下から長方形のくぼみが彫り込まれている。人物像は頭部と体部とを表現し、立つ姿の輪郭を掘り出している。長方形のくぼみ上端の

3.5cm下から頭部が浮き彫りされ、人物像の高さは25.5cm以上である。

竿部に載せられた宝珠・笠・火袋はいずれも花崗岩製で近代に復元されたものである。立像の彫られた正面は北を向いており、表面には粗割後に表面を調整したハツリ痕が確認できる。周辺には複数の石造物が敷地の南辺に並んでおり、他の石造物と同じよう



第60図 金谷遺跡と新道町の織部灯籠位置図 (S=1/25,000)



第61図 金谷遺跡の織部灯籠 (S=1/15)

にコンクリート製の台座に設置されており、敷地内で移設された可能性がある。

（3）新道町の織部灯籠

安山岩製の織部灯籠の宝珠部と竿部である。宝珠は球形の下に方形の台があり、高さは20.5cm、幅15cm、奥行き15cm、球形の高さは14cmである。球形と台との境は明瞭に浅い溝があり区分されている。

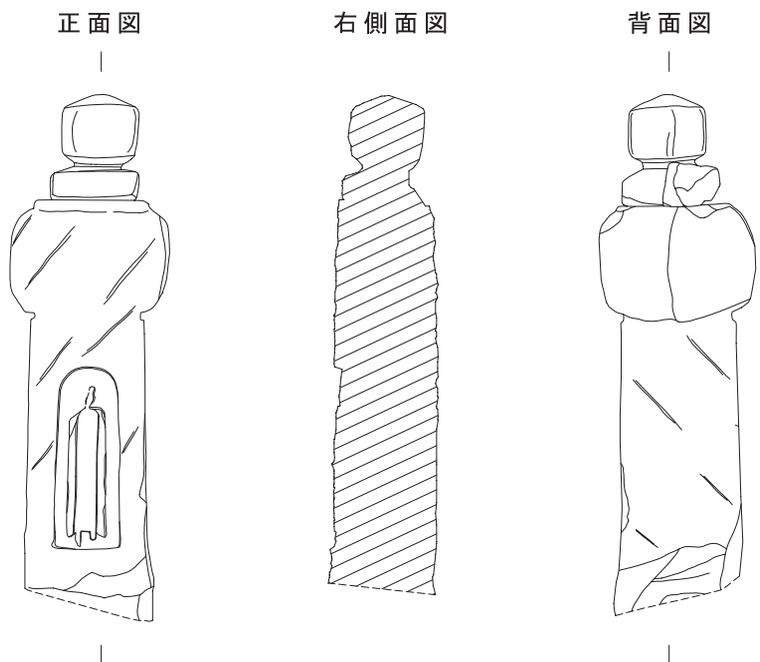
竿部は高さ80cm、幅23cm、奥行き20.5cmで、織部灯籠の特徴である球形と方形の柱とを組み合わせた形態である。傾斜する地形上に建立されており、竿部と宝珠部があり、笠・火袋は失われている。球形部分は高さ22.5cm幅32cm奥行き19.5cm、方形の柱部分は高さ57.5cm（地上に露出した部分のみ）幅23cm、奥行き20.5cmで、正面に隅丸長方形の浅いくぼみを掘り込み、その中に人物像を掘り込んでいる。長方形のくぼみは、球形部下端の下にある溝の10cm下から掘り込まれており、高さ36cm幅12.5cmである。金谷遺跡のものとは違い、長方形のくぼみの上端は半円形となっている。長方形のくぼみの下辺まで確認でき、人物像には足の表現も確認できる。人物像は頭部と体部との立つ姿を輪郭のみで表現している。立つ人物像は頭部が半分以上剥落し、表面の風化も進んでいる。人物像は高さ31.5cm幅7.5cmである。

立像の彫られた正面は南を向いており、表面には粗割後に表面を調整したハツリ痕跡が確認できる。表面は風化が進んでおり、宝珠の背面下部は部分的に欠損し、竿部の人物像も頭部は半分剥離している。

（4）金谷遺跡及び新道町の織部灯籠の時代性について

金谷遺跡の織部灯籠は江戸時代の絵図にもあるように神社境内地にあり灯籠として奉納されたもの、新道町の織部灯籠は近くに墓所があり供養塔として建立されたと想定できる。山口氏がキリシタン関連遺物であろうと指摘されているが、松田毅一氏の論考（S50年松田）によると織部灯籠は江戸時代に入り神社に奉納されるものや、墓地に供養塔として建立されたもの

が多く、日本古来の信仰である庚申信仰に関する遺物でキリシタン関連の遺物ではないと結論付けている。松田氏の分析に照らし合わせると新道町及び金谷遺跡の織部灯籠は、文字が刻まれない点から時代的には江戸時代前半にさかのぼると想定される。



第62図 新道町の織部灯籠（S=1/15）

参考文献

- 平成14年 山口八郎『諫早を歩く』第十三話
織部灯籠32p
昭和50年 松田毅一「織部灯籠とキリシタン
宗門」『キリシタン研究第二部論巧編』125p
～236p

図版出典

- 第53図 国土地理院地図「諫早」「諫早南部」
平成13年発行より作成